北陸中日新聞　2018年4月8日付

わたしと新聞

第一学院高校
金沢キャンパス編②

荒木佑美「新聞再発見」

子どもの頃、新聞は身近な存在だったが、大学に入り、下宿をしてからは読む機会がなくなり、その間にスマートフォンが台頭してきた。ニュースアプリなどが爆発的に増えた。電車の乗り換えも一週間の天気も、オリンピック速報もすぐに手元で知ることができるようになった。

地元への温かい視線

スマホのニュースは情報が早く、便利であることは確かだ。しかし、この記事には、スマホニュースにはない読み手を意識した温かな視線を感じた。読んでいる読者に、この写真を見て、この内容を知ってほしい。そんな思いが伝わってくるような気がしたのである。ネットニュースに傾倒していた私にとって、とてもうれしい発見となった。

（あらき・ゆみ）

そうして新聞から遠かったこの冬、大雪で家に閉じ込められた。例のスマホを触るのにも飽きたと思ったとき、新聞が目に入って読んでみた。昔は目も留めなかった記事も興味深かった。その中で特に見入った記事は、記録的大雪の中、市民が協力して雪かきをする姿、休業する会社、バス停の傘の花、歩道が消えた雪道、除雪車総出動、雪で覆われた川…。地元の様子が正確に描写された一面であった。